

「私にもそんな良さがあるんだな」と自分も知らなかった良さに気づきました。

この二つの体験を通じて私は強く感じたことがあります。それは日本人と留学生には、お互いは自分たちも気づいてない良さがたくさんあるはずだということですから、お互いの良さを見つけて、認め合うことから始め、それを重ねて行けば、今までなかった何かきつと作られるはずで、それも今までであったものよりもっといいものが作られるはずで、その何かを皆さん一緒に作っていきませんか。

名古屋語学教育研究室のホームページを開きました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

『01 公開講座「言語」のご案内』

愛知大学言語学談話会

前半 豊橋校舎 / 後半 9月より車道校舎
午後2時半～4時半

2001年

7月7日 「主語、目的語、その他の文構成要素 W. クロフトの文法関係論を中心に」
伊藤忠夫（中京大学教養部教授）

9月22日 「ロシア語の移動表現について」
清水伸子（愛知大学経済学部講師）
「EUにおける言語教育政策 オランダの外国語教育の現状」
平尾節子（愛知大学法学部教授）

10月13日 「身体と空間」
片岡邦好（愛知大学法学部助教授）
「近代初期イギリス人の国語観、国語問題」
多田哲也（愛知大学法学部助教授）

11月10日 「飲食に関する中国語の楽しい表現」
鄭 高咏（愛知大学法学部助教授）
「漢詩の流れ 詩形を中心に」
矢田博士（愛知大学経営学部助教授）

12月8日 「学習文法とコーパス⁽³⁾」
塚本倫久
（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）
「大学における中国語教育の再検討⁽²⁾」
安部 悟（愛知大学現代中国学部助教授）

2002年

1月12日 「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語」
田川光照（愛知大学経営学部教授）
「漢字文化圏における表音文字の背景」
陶山信男（愛知大学名誉教授）

編集後記

21世紀は日本の世紀である、などと煽てられ、日本中が浮かれ騒いだのは10余年ほど前のことである。儲けをたくらんで株を買い漁った経済官僚や経済学者が何人も損をして、彼らの学説の化けの皮が剥がれた。景気浮揚の学説はないものか、いろいろ説を唱えるものはいるようだが、世の中は理論どおりにはうまくいかない。

この惨めな日本にかわって登場したのが、中国である。封建時代、毛時代と民衆は長きにわたり貧しいままに捨て置かれていたから、富への渴望は、当然ながら、異常なほど激しく、今世紀が中国の世紀になることは間違いないであろう。13億の民がいま金持ちになるため競い合っている。

しかし、この資本主義を指揮しているのが共産党というのだから、驚きである。共産主義運動が民衆を解放し、平等という価値に目覚めさせたその歴史的功績は高く評価されるべきだが、共産党にとって、欲望が人間を労働に向かわせるものである、衣食が満たされてもそこで欲望が消え去るものではない、飽くなき欲望こそが社会発展の原動力であることが分かったいま、共産党も昔のままでいてはならないであろう。20世紀までに政治・経済・文芸・芸術など多くの面で主義主張が出尽くした感がある時、我々は共産的資本主義とも呼ぶべき新しいモラル獲得の壮大な実験場に立ち会っていることになるのであろうか。それはつまり外資を利用して経済規模を拡大し富の高上げを実行して、得られた富の分配を世界中どこにも前例のない公平さで行うことであろうか。服部先生の記事を読みながら、こんなことを思ってみた。

(S. K.)